

コラム

2006/12 (7)

こんにちは。副園長の佐藤です。最近はめっきり寒くなってきました。幼稚園の銀杏や楓も紅葉してきて、短い間ですが眩しいほどの色を楽しんでいます。季節の移り変わりを感じるのに絶好ですね。

いつまで乗せますか？

それは、「ベビーカー」のことです。2歳児さんに、今すぐ止めてくださいというのではありません。しかし、お襦袢同様、親の都合で乗ってもらっている事なので、親が決断しないことには止めることはできません。5歳・6歳になっても、乗っているお子さんが極まれにいます。

1歳のお誕生日の頃から、多くの子ども達は歩き始め、するとすぐに…走り始めます。そのころの子どもの表情を思い出すと、歩いているだけなのに何か上気して、「自分でできる、動けるって、本当に嬉しいなあ」という顔だったと思います。まだ十分に歩けないのに、階段だの坂道だの、どんどん難しい所へチャレンジ。いつ転ぶかと、ハラハラ見守っていました。

アシモじゃないけれど

ホンダの「アシモ」という歩行ロボットをご覧になったことがある方は多いと思います。まるで人間そっくりな歩き方。「バランスを一旦崩して、それをフォローする形で歩いていく」という発見が、あの歩き方を生み出したのだそうです。だから、「立つ」と「歩く」の間にはかなりの隔りがあるのです。高度なバランス感覚と、それに応じた筋肉の細かいコントロールが、2本足歩行を支えています。そして、沢山の場面を経験することによって、その技術は洗練され、ついに殆ど意識せず「歩ける」ようになっていくのだそうです。体の準備ができてから、沢山の経験（や失敗）をつんで初めてできるようになる、というのはお襦袢や歩行に限らず、何かを習得するための基本的道筋と言えるでしょう。

我が家のベビーカー歴

私の長女は7歳ですので、ベビーカーを初めて買ったのは7年前でした。「赤ちゃんが生まれたら買わなければならない」と、確か生後5ヶ月ごろに

最初の一台を買いました。それから現在に至るまで、レンタルを含め5台の歴史が、我が家にはあります。

今から振り返ると、転機は長男が生まれた頃でした。ベビーカーの後ろにつける補助ボードのようなものが発売され、もう歩けるにもかかわらず、娘はそれに乗り続けたのです（結構歩けるようになっていたのに…！）。「そこにあるんだから、使いたい。乗りたい。アタリマエデショ」とでも言いたい風情でした。「弟が乗っているんだから、私も乗りたい」という対抗意識もあったかと思います。

かなり自己主張もしていた時期ですので、「つける・つけない」で相当やりあいました。その頃の彼女の必殺技は。

「疲れた～！抱っこして！おんぶして！肩車して！（父のみ）」

こちらの都合で一緒に外出して貰っている事が殆どですから、ある程度は聞いてあげなければ、とと思って付き合いました。でも相当な体重でした！2歳の彼女は。もちろんスキンシップとしても、抱っこオンプはとても良いことです。出来る限りしてあげたいと思います（つまり限界になったら止めたのです）。そんな中、我が家でうまくいったのが、「疲れたら一休みしようね」でした。暫く休んでいると、回復したのか観念したのか、再び歩けるようになりました。相当しつこく繰り返しましたが、お陰様で長男の時は最初から「一休みしよう」でやり過ごすことができました。

ベビーカーの功罪

小さい子どもが、大人と一緒に出かけできる。多少の荷物も運べる。寝てしまっても大丈夫。ちょろちょろしないから安全。確実に、多くの利点があります。でも。その裏返しとして、マイナスポイントもあるのです。親のぬくもりが感じられない。耳元で会話もできない。のんびりしているから注意力が育つわけでもない。体力もつかない、器用になるのでもない。この両面は、まさしく「親から見たら・子どもから見たら」という視点の違いのような気がしてなりません。今すぐ、とは言いません。親が決断しないと、子どもは降りられません。手をつなぎ、道ばたの草花の話をし、「自分でできる！」という、文字通り独り立ちの自信に満ちた子どもになっていく分かれ道が、そこにはあると思います。